

8月23日、群馬県伊勢崎市のサンデンハ斗島事業所。木内和宣社長らが見守るなか、流線形の白い車が音もなく構内を駆け抜けた。「走りが滑らかで車内も静か」と一同を感心させたのは、サンデンが開発に参加した電気自動車（EV）の「SIMLEI」。モーターは車軸に内蔵、エンジンルームには同社製のカーエアコン用コンプレッサーが収まる。

# 産学官でEV参入競う

## 第3部 暮らし変える技術力



同社は2010年からEVベンチャーのシムドライプ（川崎市）のプロジェクトに参加し、EV向け製品の研究を進めている。ガソリン車のエアコンがエンジンの回転を動力源とするのに対し、

EV用エアコンはガソリン車に劣らぬ性能を発揮する（群馬県伊勢崎市のサンデンハ斗島事業所）

レッサーが収まる。同社は2010年からEVベンチャーのシムドライプ（川崎市）のプロジェクトに参加し、EV向け製品の研究を進めている。ガソリン車のエアコンがエンジンの回転を動力源とするのに対し、

EV用は電気。構造は大きく異なるが、SIMLEIに搭載したエアコンは「従来品と同等以上の冷房性能を既に達成した」（開発担当者）。EVを支える技術環境は着実に進歩している。

日産の車分解  
ガソリン車から次世代自動車へ。自動車産業が技術の転換期を迎えるなか、北関東の産学官はこぞって参入の機会をうかがう。

茨城県の産学官でつくるいはらき成長産業振興協議会。「これがモーターか」。8月3日、ひたちなか市のホテルで開いた会合で、出席者の前に並んだのはバラバラに分解された日産自動車のEV「リーフ」。先進事例を分析し、ビジネスのヒントを探るのが目的だった。同会は今年度中にバッテリーやモーターなどを主要部品ごとの分科会を設置し、本格的な研究に着手する。

群馬県では群馬大学と県内の企業が09年に次世代EV研究会を設立。1人乗りの超小型EVを試作し、県内各地で実用試験を進めている。自動車部品大手のミツバが駆動モーターを製作したのを

はじめ、主要部品の大半を県内企業が手がけた「オール群馬」のEV。2月の試乗会でハンドルを握った大沢正明知事は「将来が楽しみだ」と目を細めた。

栃木、群馬の中小企業でつくる連携組織「モノづくり両毛」は今春、市販車をベースにしたEVを試作した。参加したのは自動車部品を手がける瀨川製作所（栃木県足利市）、自動車整備の小浦商店（群馬県館林市）、金属加工のこいずみ（同大泉町）など地場で生ま

れ育った企業だ。指導役を務める日本能率協会専任講師の中村茂弘氏は「地域内で短距離を移動する足としてのニーズを想定している」と話す。本業の傍ら、走行試験を担当するこいずみの嶋田英昌社長は「コストパフォーマンスでは大手にかなわないが、付加価値のある車を開発したい」と意気込む。

次世代車幅広く  
しかし、次世代車の世界でEVが主役の座を占めたり獲得できるとは限らない。ハイブリッド車や燃料電池車、低燃費型EVが自動車市場を独占する可能性は少ないとの読みだ。

自動車部品メーカーの深井製作所（足利市）が考案したのは、金属板にハチの巣状の凹凸を打ち込む成型技術。板の厚みを3割減らしても強度が変わらないのが特徴で、車体の軽量化に役立つ。既にスズキが小型車の遮熱板に採用している。

未来の自動車産業の主流となる技術は何か。各社とも市場の潮流を探りつつ、技術開発を急いでいる。

## 「転換期」逃さず 技術力結集